

森 遺 跡 II

1990. 3

交野市教育委員会

例 言

1. 本書は、交野市教育委員会が実施した森遺跡の調査報告書である。
2. 森遺跡の発掘調査委員会を組織し、交野市教育委員会の奥野和夫と山口博志が、下記委員の教示を得て調査を担当した。
委員長 原田誠一（交野市長） 副委員長 水野正好（奈良大学教授）
委員 伊藤史朗（交野市教育長） 委員 堀江門也（大阪府教育委員会）
委員 玉井 功（大阪府教育委員会） 委員 景守紀子（府立交野高校教諭）
委員 奥野平次（交野市文化財保護委員）
委員 尾亀健次（交野市企画財務部）
3. 本書の執筆並びに遺物の整理・実測については真鍋成史、小川暢子、嶋澤泰彦、森口健太郎、西中園修、齋藤登美子、諸氏の協力を得た。
4. 調査の実施に際しては、前述の諸氏を始め、大中俊文、船吉仙句、北村尚博、竹内毅、百済学、須田将昭、仲西功夫、竹広香菜、射場邦栄、藤本直子、富松大、板野史、祢宜路代、小林啓子、諸氏の参加を得た。

は し が き

市道磐船駅前線の建設に伴う森遺跡の発掘調査も途中、中断の期間はございましたが、本年度で3年を経過いたしました。

この間、調査の方といたしましては、三次にわたって大規模な発掘調査を実施いたしました。この結果、これまで交野市内においてはその存在が確認されておりませんでした古墳時代における土器類の他、木器及び鉄製品等、多種多様の遺物を多量に出土したのを始め、住居跡並びにそれに伴う井戸や溝の他、鍛冶に伴う施設とも推定される堰等を検出し、多大の成果を取めることができました。

これらの調査の成果は、整理・復元作業が終了いたしましたものから順次、皆様方に調査結果を報告するよう予定いたしております。

尚、これまで市民の皆様又は、関係各機関の方々の御協力により実施いたしてまいりましたこの発掘調査につきましては、一応、平成2年の8月末日をめどに調査を終了する予定にいたしております。

つきましては、調査終了までは、今後とも何かと御迷惑をおかけすることと存じますが、どうかより一層の御理解、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

交野市教育委員会
教育長 伊藤 史朗

目 次

例 言

はしがき

第1章 調査に至る経過	1
第2章 位置と周辺の遺跡	3
第3章 調査の概要	5
(1)位置	5
(2)層序	5
(3)遺構	6
(4)遺物	10
第4章 まとめ	31

挿 図 目 次

- 第1図 調査位置図
- 第2図 遺跡分布図
- 第3図 北側断面実測図
- 第4図 西側断面実測図
- 第5図 平面実測図
- 第6図 土埴 1
- 第7図 土埴 4
- 第8図 土埴 5
- 第9図 土埴 7・8
- 第10図 土埴10・11・12
- 第11図 土埴13～20（鍛冶炉）
- 第12図 土埴22
- 第13図 土埴26・27・28
- 第14図 溝 2・堰部分
- 第15図 木器集中遺構
- 第16図 須恵器実測図
- 第17図 土師器実測図(1)
- 第18図 土師器実測図(2)
- 第19図 鍛冶関連遺物実測図

表 目 次

- 第1表 出土土器観察表
- 第2表 鍛冶関連遺物出土表
- 第3表 桃核出土表

第1章 調査に至る経過

交野市が建設を予定している都市計画道路・磐船駅前線の建設に先だって実施している森遺跡の発掘調査は、昭和61年7月から9月にかけて、全面的な試掘調査を行い、その結果、道路予定地のほぼ全域に古墳時代を中心とする遺跡が存在することを確認した。

引き続き昭和63年2月から同年6月にかけて実施された第2次調査は、これまでの試掘トレンチによる調査から本格的な調査を実施した。

これまでの調査の結果、地理的な面としては、古代糸里制の遺構と考えられてきた、現在の耕地面は比較的新しい時期に造られたものであり、その下層面に、現在の地割とは異なる中世の耕作面が存在することが確認された。

又、検出した遺構及び遺物からの考察により、明確な建物跡の確認はできなかったが、多量の鉄滓及びフイゴ羽口、砥石等の遺物を出土し、付近に鍛冶関連施設が存在していたことが推定された。

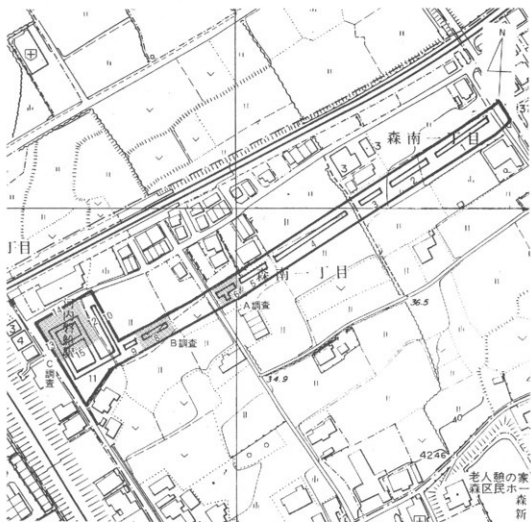
又、出土土器については、古墳時代特に森古墳群と車塚古墳群が築造される時期のものが最も多く出土しており、その範囲は、かつての森地区（戦前）の集落の範囲よりも広い範囲にわたっていたことが判明し、古墳築造に関連した専門的な集団が居住していたとの推論を得た。

このような調査の結果をもとに実施された第3次調査は、前回に比較して調査面積を大幅に拡大して、平成元年5月8日から10月19日にかけて実施した。

調査の結果、前回の調査と同じく耕地の築造時期やその形態の変化及び鍛冶関連遺構としての鍛冶炉や、それに伴うものと見られる掘立柱建物跡の検出とそれに伴う鉄滓等の遺物の出土は、前回の存在するであろうとした推論をより具体的なものとした。

今後の調査予定については、第3次調査のC調査区とは、最も離れた道路予定地の東端より西に向って順次調査を進め平成2年度内に調査を完了する予定である。

尚、今回の調査では、塚に伴う多量の木製品が出土したが、現在まだ整理中であり、今回の報告書では、概略のみを記載し、詳細については、次回の報告書（森遺跡III）に委ねることとした。



第1図 調査地位図

1 : 2,500

第2章 位置と周辺の遺跡

森遺跡は、交野市森南に所在する。森遺跡は同遺跡の東側をほぼ南北に走る生駒山地より西側へのびる尾根筋の先端部分から平野部との間の標高30mから50mの間の東西500m、南北300mの範囲で存在し、現在の森南地区のほぼ全域を含んでいる。

森遺跡については、昭和30年に大門清造氏の敷地内より出土した遺物により、その存在が一般に知られるようになって以来、これまでの発掘調査の結果から弥生時代の後期から現在に至るまでの遺跡が存在することが明らかとなり、特に古墳時代における遺跡が最も多く存在することが判明した。

現在、森遺跡については、その範囲を一応、現在の行政区域である森南地区に限定しているが、森遺跡そのものの位置は時代によって変動しているようであり、古代の森遺跡の範囲を想定するうえにおいては、現在の行政区である私市及び寺地区の地域を含んでいたことを考慮すべきであろう。

森遺跡の周辺の遺跡としては、同遺跡と密接な関係をもつものとして、森古墳群と車塚古墳群があげられる。前者は、森遺跡を一望にして見おろすことができる山地部分の尾根筋上に存在する、府下でも最古の前方後円墳を擁する前期古墳群であり、又後者はそれより継起するであろうとされる市内では最大規模の中期古墳群であり、両者は森遺跡を挟む形で存在している。これらの遺跡と深い繋がりを持った森遺跡も又古代交野における重要な位置を占めていたと考えられる。

その他の遺跡としては、森遺跡に先行する遺跡として、前述した大門氏の敷地付近と、その山上の標高250m付近の高地性集落と見られる寺南山遺跡や、天野川の対岸の坊領遺跡などの弥生後期の遺跡が存在する。

以上のように、森遺跡及びその周辺は、特に弥生時代と古墳時代の遺跡が数多く存在する。



- | | | | |
|--------------|-------------|-----------|-------------|
| 1 郡津御寺遺跡 | 3 郡津丸山古墳 | 4 郡津大塚 | 5 郡津御所 |
| 6 安野郡御跡 | 7 長宝寺跡 | 8 郡津城跡 | 9 郡津城遺跡 |
| 10 北田原御宅(遺文) | 11 やがしろ遺跡 | 12 縣西遺跡 | 13 郡津小学校西遺跡 |
| 14 豊田遺跡 | 18 神宮寺遺跡 | 19 郡北寺跡 | 20 尾上遺跡 |
| 22 經島寺跡 | 23 大寺北遺跡 | 24 大谷宮跡 | 25 中上古墳跡 |
| 26 京の山古墳 | 27 山崎宮宅(遺文) | 28 今井遺跡 | 29 寺村遺跡 |
| 30 東原古墳跡 | 31 寺古墳群 | 34 麻山遺跡 | 35 森古墳跡 |
| 36 郡津小学校南遺跡 | 37 郡津遺跡 | 38 天田神社遺跡 | 39 郡津河原遺跡 |
| 40 馬場遺跡 | 52 門ノ木遺跡 | 53 郡津遺跡 | |

第2図 遺跡分布図

第3章 調査の概要

(1) 位置

今回の調査区であるC調査区は、京阪電鉄の河内森駅とJR河内磐船駅とを南北に結ぶ道路の東側に沿った交野市森南1丁目390番地に位置する。標高33.1mである。

付近の地形は、南から北へ、東から西へと段々と傾斜しながら耕作地を形成している。

現在、調査区の西側及び北側は、京阪電鉄・交野線とJR片町線の線路敷によって視界を妨げられた形となっているが、かつては交野の平野部を一望することができる位置であった。

A調査区は、この土地の東西30m、南北25mの750m²の面積を調査区域とし、発掘調査を実施したものである。

(2) 層序

C調査区の基本的な層序は、表土である耕作土層とその下層の灰色系の砂質土層、それに包含層である黒色系土層とベースである花崗岩質の砂層から形成されている。

同調査区では、南から北へ、東から西へと傾斜している地形の関係から、調査地の東端及び南端の部分では、表土層を取り除くと、約20cm又は、それ以下でベース層となるため、断面図の記録は西側及び北側の二面のみとした。

北側断面については、第15層の黄灰色砂質土層及び第16・17層の暗緑灰色粘質土層又は砂質土層の上面に、6世紀前後の遺物を含む黒色の粘質及び砂質土層である第8・10・11・12・13層が堆積し、その後、この黒色土層の一部を取り崩す形で、河床跡であったと推察される第13層が中世までの間に堆積する。中世になると耕作地とするために、それまでに堆積した層が削平を受ける。このために黒色土層は東側に向かうにつれて層の堆積が薄くなり、東端部分では、黒色土層の下層である黄灰色砂質土層までが削平を受ける。このようにして形成されたこの耕作面も、やがて、この地区にて大規模に実施されたと推定される耕地整理に伴って搬入されたと思われる褐色系の土層の堆積によって埋没し、現在の耕作面のような形となった。このような過程のもとに北側断面は形成されてきたと考えられる。

西側断面については、北側のベース面が東から西へ傾斜しているのに対して、南か

ら北への傾斜を示しているが、基本的には同様の層序を形成している。

同断面についても、北側部分では、堰を伴う河川や、北側断面の第13層と同じ河川の影響により、黒色土層と灰色系の砂層が入り混って堆積しているのが見受けられるが、この断面の層序から推察する限り、この上層の第6層より上層については層序が整然と堆積しており西側を流れる河川による影響は認められない。

このようなことから、この河川については、鎌倉以降になって、耕地整理が実施されたのに伴って築造されたものであると考える。

(2) 遺構

今回の調査で検出することができた主な遺構としては、(1)調査区の中央をほぼ対角線状に流れる水路に築かれた灌漑用の堰と周辺の木片集中区、(2)鍛冶関連に伴うものと推定される掘立柱建物、及び鍛冶炉跡、ピット、井戸、(3)現在の耕作地以前の旧耕作面と、これに伴う溝・鋤溝等の三つがあげられる。その他の遺構としては土器が多量に出土した土壇等を検出した。

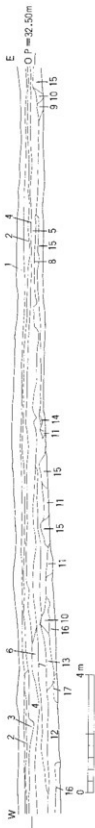
土壇1 調査区の中央北西部より検出した。最大幅3.7m、最深部0.6mを測る。埋土は、上層が赤黒色粘質土、下層が黒色粘土である。遺物は、須恵器・土師器・フィゴ羽口・鉄滓・炭化材・桃の種子が出土している。時期は、出土土器から上層が6世紀前半、下層は5世紀後半頃に推定できる。また土壇1は溝2によって切られている。この遺構の上層の土器・溝2下層の土器、木器集中区に散在していた壺（遺物実測番号10）の破片を接合することができた。

土壇3 土壇3は、木器集中区の東側より検出され、直径1.5mの円形土壇で、最深部は、0.3mを測る。埋土は黒色粘質土である。遺物は、須恵器・土師器・鉄滓・桃の種子を出土した。

時期については、6世紀前半頃と推定される。

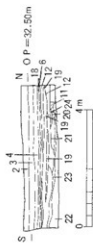
土壇4 調査区の北西部より検出した。最大幅1.5m、最深部0.4mを測る。埋土は、第1層が黒褐色土、第2層が灰黄色砂質土、第3層が黒色粘質土、第4層が黒褐色砂質土、第5層が黄灰色砂質土である。遺物は須恵器・土師器・フィゴ羽口・鉄滓・砥石・木片を出土した。時期は出土土器が破片のため明確に述べられないが、6世紀前半であろう。この遺構は、その形態から井戸として性格付けできよう。

土壇5 調査区の中央北側より検出した。最深部は0.6mを測り、長軸は一部調査区



第3圖 北側断面実測図

- | | | |
|--------------------|-----------------------|----------------------|
| 1 表土 | 10 黒色砂質土(7.5YR2/1) | 18 黒褐色土(5YR3/1) |
| 2 暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2) | 11 黒色粘質土(N1.5/) | 19 灰白色砂質土(10YR8/1) |
| 3 灰黄褐色土(10YR5/2) | 12 黒色粘質土(5YR1.7/) | 20 黒色土(N1.5/、砂混じり) |
| 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) | (砂質を含む) | 21 灰色土(7.5Y4/1、砂混じり) |
| 5 黒褐色砂質土(7.5YR3/1) | 13 灰黄色砂質土(2.5Y6/2) | 22 灰色土(7.5Y4/1、砂混じり) |
| 6 黒褐色砂質土(5YR3/1) | 14 灰色粘質砂層(10Y4/1) | 23 褐灰色土(10YR4/1) |
| 7 黒褐色粘質砂質土(5YR2/1) | 15 黄灰色砂質土(2.5Y4/1) | 24 赤灰色土(2.5YR5/1) |
| | (鉄分を含む) | |
| 8 黒色砂質土(2.5GY2/1) | 16 暗緑灰色粘質土 | |
| 9 黒褐色砂質土(10YR3/1) | 17 暗緑灰色粘質土(10GY4/1) | |
| | (灰黄褐色砂質土、10YR4/2)を含む) | |



第4圖 西側断面実測図

外で分らないが、現存長2.5m、短軸は1.2mを測る。埋土は、大きく分けて上層が粘質土、下層が砂質土である。遺物は須恵器・土師器・フイゴ羽口・鉄滓を出土した。時期は、出土遺物から5世紀後半から6世紀前半にかけてであると考えられる。

土壇7・8 調査区の中央部北側より検出した。土壇8は、最大幅30cm、深さ2cmを測る土壇で、周囲の土は熱により変色しており、鍛冶炉と推定される。土壇7は、土壇8の周囲を取り囲み、北側が深く、南側が浅い。遺構の性格としては、大阪府柏原市大泉遺跡で検出された周溝の巡った鍛冶炉と形態が同じであり、鍛冶生産に関連する土壇の可能性が高い。遺物はまったく検出できなかったが、鍛冶生産に使用されたフイゴ羽口・鉄滓が近接する土壇1上層より多量に出土しており、時期もそれと近接する6世紀前半頃と推定される。

土壇10・11・12 調査区の西端中央部より検出した。土壇10は、縦幅1.9m、横幅0.9m、最深部0.1mを測る。土壇11は、縦幅1.8m、横幅0.8m、最深部0.1mを測る。土壇12は、縦幅3.4m、横幅1.1m、最深部0.2mを測る。埋土は黒色粘質土である。遺物は須恵器・土師器・フイゴ羽口・鉄滓・炭化材が土壇より出土しているのみである。時期は、出土土器が破片のみで明確に述べられないが、土壇12の出土遺物から6世紀前半から6世紀中頃にかけてであると考えられる。

土壇13・14・15・16・17・18・19・20（鍛冶炉） 調査区の中央南西部より検出した。土壇13は、最大幅50cm、最深部13cmを測り、埋土は黒色粘土層のみである。土壇14は、最大幅36cm、最深部10cmを測り、埋土は黒色粘土層のみである。土壇15は、最大幅70cm、最深部10cmを測る。埋土は黒色粘質土で上下2層に分かれる。土壇16は、最大幅30cm、最深部10cmを測り、埋土は基本的には、2層で、上層が黒色粘質土、下層が黒褐色粘質土である。土壇17は、最大幅40cm、最深部6cmを測り、埋土は黒色粘質土層のみである。土壇18は、最大幅20cm、最深部6cmを測り、埋土は黒色粘質土層のみである。土壇19は、最大幅80cm、最深部28cmを測り、埋土は8層に分層され、5層と6層、3層と4層、1層の3回の鍛冶操業が考えられる。土壇20は、最大幅55cm、最深部7cmを測り、埋土は上層が黒色粘質土、下層が黒色粘土である。

鍛冶炉周辺ではフイゴ羽口の破片数が49個、鉄滓が7435g出土している。その他に、須恵器・土師器・製塩土器・炭化材・桃の種子が出土している。鍛冶操業の期間は、出土遺物から6世紀中頃から6世紀後半にかけてであろう。

土壇22 調査区の北東部より検出した。最大幅0.9m、最深部0.3mを測る。埋土は、

黒色粘土層の一層のみである。遺物は、木製の把頭が出土しているのみである。時期を決定出来る出土遺物は検出できなかったが、古墳時代後期に比定できよう。この遺構は、その形態より井戸として性格付けできよう。

土壇26 調査区の南西部分より検出した。最大幅1.3m、最深部0.4mを測る。埋土は、黒色粘質土で3層に分かれる。遺物は、須恵器・土師器・製塩土器・フィゴ羽口・鉄滓・炭化材が出土した。時期は、出土遺物から5世紀後半から6世紀初頭にかけてであろう。この遺構は、その形態より井戸として性格付けできよう。

土壇27 調査区の中央部南端より検出した。最大幅1.5m、最深部0.3mを測る。埋土は、黒色粘質土で上下2層に分かれる。遺物は、須恵器・土師器・製塩土器・フィゴ羽口・鉄滓・炭化材が出土した。時期は、出土土器が破片で明確に述べられないが、古墳時代中期から後期、5世紀後半から6世紀前半にかけてであろう。この遺構は、土壇26と同様に井戸として性格付けできるであろう。

土壇28 調査区の東南部分より検出した。最大幅1.4m、最深部0.4mを測る。埋土は、黒色粘質土で上下2層に分かれる。遺物は、須恵器・土師器・フィゴ羽口・鉄滓・炭化材が出土した。時期は、出土土器が破片のみで明確に述べられないが、5世紀後半から6世紀前半にかけてであろう。この遺構も又土壇26・27と同様に井戸として性格付けできるであろう。

溝1 調査区の東側より検出した。溝2の上面を流れ、最大幅2.0m、最深部0.1mを測る。埋土は、ほとんど白色砂層で、遺物は須恵器・土師器・製塩土器・フィゴ羽口・鉄滓・桃の種子が出土した。時期は、出土遺物と溝2の上面に位置することから6世紀後半に比定できよう。

溝2 調査区の西側より検出した。最大幅5.0m、最深部0.4mを深る。埋土は、下層が黒色粘質土で上層が黒色砂質土である。遺物は須恵器・土師器・製塩土器・フィゴ羽口・鉄滓・砥石・鉄器・炭化材・桃の種子を出土した。時期は、出土土器や土壇1との切り合い関係及び土壇1上層や木器集中区に散乱していた土器の破片が一致することからこの溝は、6世紀前半以前に掘削され、6世紀中頃までに廃棄されたものと見られる。

又、溝2からは堰が検出されている。堰は、全長約4mを測る。構造としては、現存長130cm、直径6cm程の丸太を横木とし、その背後に直径3.5cmから4.5cm程の丸杭を打ち込んで横木を固定して水を堰止め、東側の溝に分水していたものと思われる。古

墳時代の灌漑設備を考える上で重要な資料である。

溝2からは、多数のフイゴ羽口・鉄滓が出土しており、その遺物の時期が鍛冶炉が存在する地区周辺の遺物と同時期であることから、溝2が廃棄された後に鍛冶作業が行われたものであろう。

溝3 調査区の南西部隅より検出した。最大幅2.5m、最深部0.5mを測る。埋土は上層が黒色粘質土で下層が砂質土である。遺物は須恵器・土師器・フイゴ羽口を出土した。時期は、出土土器が破片で明確に述べられないが、5世紀後半から6世紀前半にかけてであろう。

木器集中遺構

木器集中箇所は、調査区の西端より検出した。当初の調査区外に木器の大部分が埋まっていると予想されたために一部を拡張して調査を継続した。

後世による掘削のために遺構の形態を明確にできなかったが、遺物としては須恵器・土師器・鉄滓を出土した。時期については、土壇1の上層・堰の部分と同じく6世紀前半頃であると考えられる。

鋤溝

鋤溝は、山側に向かって弧を広げ扇状に掘削されている溝が多数検出されている。埋土は、上層が黒色砂質土、下層がオリブ黒色土層である。遺物は瓦器・土師器などが出土しており、時期としては鎌倉時代の12世紀頃と推定される。

尚、調査地北東より南西に至る鋤溝としている大規模な溝については灌漑用の溝である可能性も十分考えられる。

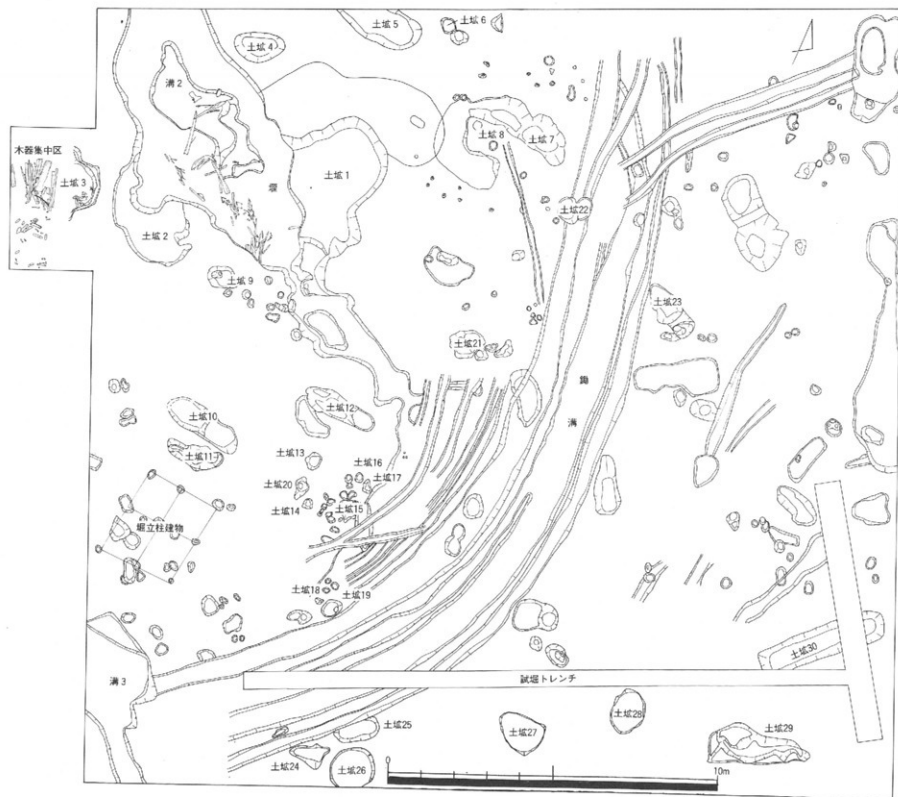
掘立柱建物

調査区の西端で検出された。柱穴の直径は平均30cm程で、2間×2間(2.9m×2.4m)の総柱建物である。柱間寸法は桁行1.45m、梁行1.20mである。住居としては狭く、倉庫と考えられる。

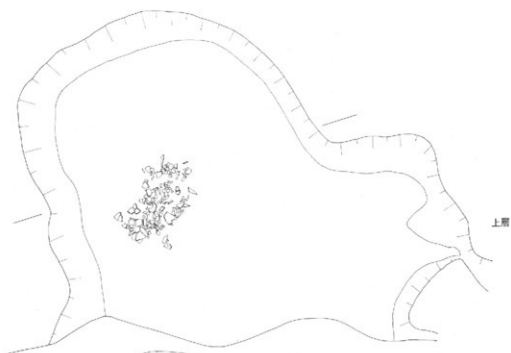
(4)遺物

(1)土器類

C調査区からは須恵器・土師器・製塩土器が出土している。以下、土器観察表を元に考察を進める。(第16・17・18図、第1表)



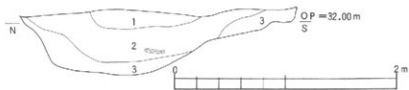
第5図 平面実測図



上層

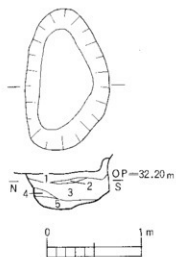


下層



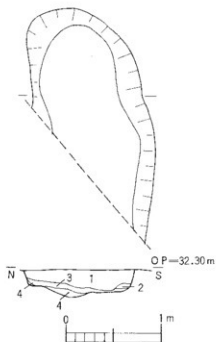
- 1 赤黒色粘質土(2.5Y R1.7/1)と褐色砂質土(7.5Y R4/4)をしま状に含む。
- 2 黒色粘土(10Y R1.7/1)
- 3 黒色粘土(7.5Y R1.7/1)と黄灰色砂層(2.5Y 4/1)をしま状に含む。

第6図 土 城 1



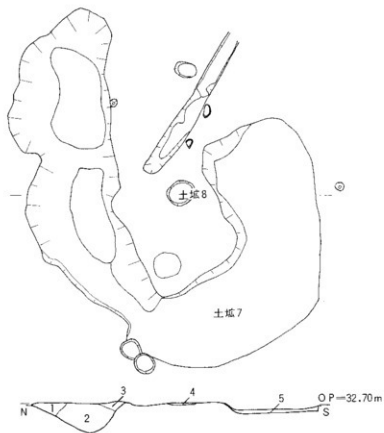
- | | |
|-------------------------------|----------------------------------|
| 1 黒褐色土(10YR3/1・
灰色砂質土:まじり) | 4 黒褐色砂質土(2.5Y3/1・
1~2mmの砂粒含む) |
| 2 灰黄色砂質土(2.5Y7/2) | 5 黄灰色粘質土(2.5Y4/1) |
| 3 黒色粘質土(2.5Y2/1) | |

第7図 土 城 4



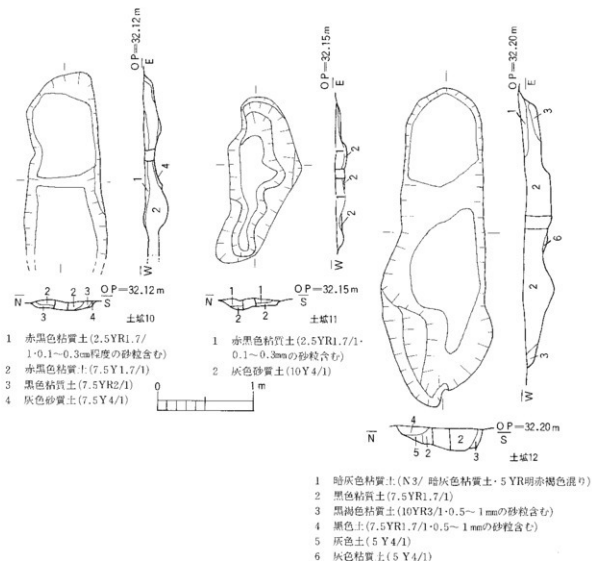
- | | |
|---------------------|------------------|
| 1 黒色粘質土(7.5YR1.7/1) | 3 黄灰色砂層(2.5Y4/1) |
| 2 オリーブ黒色土(5Y3/1) | 4 灰色砂質土(10Y5/1) |

第8図 土 城 5

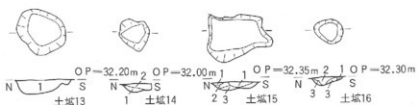


- 1 オリーブ黒色砂質土(7.5Y3/1・0.2~1.0mmの砂粒含む)
- 2 黒色粘質土(5Y2/1)
- 3 黒色砂質土(7.5YR1.7/1・0.4~1.0mm砂粒含む、金気まじり)
- 4 黒褐色砂質土(10YR2/2、金気まじり)
- 5 黒色砂質土(7.5YR2/1・0.5~1.0mmの砂粒含む、金気まじり)

第9図 土塚 7・8



第10図 土城10、11、12



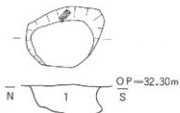
- | | | | |
|---------------------------------------|------------------------------|-----------------------------------|---------------------------------|
| 1 黒色粘土(砂質)1.7m、若干箇黄銅
色砂土(0YR5/2含む) | 1 開口 | 1 赤褐色粘土(5YR1.7/1-5
mmの砂粒、鉄滓含む) | 1 赤褐色粘土(5Y 4/1-2mmの砂粒含む) |
| 2 黒色粘土(10YR1.7/1-2mm
の砂粒と鉄滓含む) | 2 黒色粘土(10YR5/1-5mm
の砂粒含む) | 2 黒色粘土(10YR5/1-4-5mm
の砂粒含む) | 2 黒色粘土(10YR1.7/1、鉄滓含む) |
| | | 3 開口 | 3 黒褐色粘土(10YR3/1、2をブロッ
ク状に含む) |



- | | | | |
|---------------------------------------|----------------------------|---|--------------------------------|
| 1 黒色粘質土(10YR1.7/1-1-5mm
の砂粒及び鉄滓含む) | 1 黒色粘質土(10YR1.7/1
鉄滓含む) | 1 赤褐色粘土(10YR1.7/1、鉄滓及
び1-2mmの砂粒若干含む) | 1 黒色粘質土(5YR1.7/1、鉄滓を
多量に含む) |
| | 2 開口 | 2 黒色粘質土(10YR3/1、金灰まじ
り及び1-3mmの砂粒含む) | 2 赤褐色粘土(10YR2/1、金灰まじり) |
| | | 3 赤褐色粘質土(10YR3/1、金灰ま
じり) | |
| | | 4 赤褐色粘土(10YR1.7/1、金灰
まじり) | |
| | | 5 灰白色粘質土(5GY5/1、
金灰まじり及び1-3mmの砂粒若干) | |
| | | 6 赤褐色粘土(10YR1.7/1) | |
| | | 7、開口 | |
| | | 8 5と7の残存層 | |



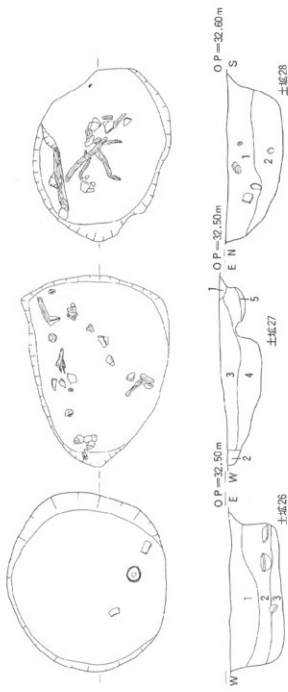
第11図 土城13~20 (鍛冶炉)



- 1 黒色粘土



第12図 土城 22

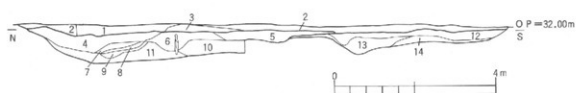


- 1 黒色粘質土(10YR1.7/1、金灰まじり)
 2 黒色粘質土(7.5Y 5/1、灰色砂質土含む)
 3 黒色粘質土(10YR1.7/1)

- 1 灰黄褐色粘質土(10YR4/2、金灰まじり、
 0.5mm程度の砂粒含む)
 2 黒色砂質土(10YR2/1、金灰まじり)
 3 黒色粘質土(10YR1.7/1、金灰まじり、
 0.5mm程度の砂粒含む)
 4 黒色粘土(10YR1.7/1、金灰まじり)
 5 黒褐色砂質土(2.5Y 3/1、地山まじり)

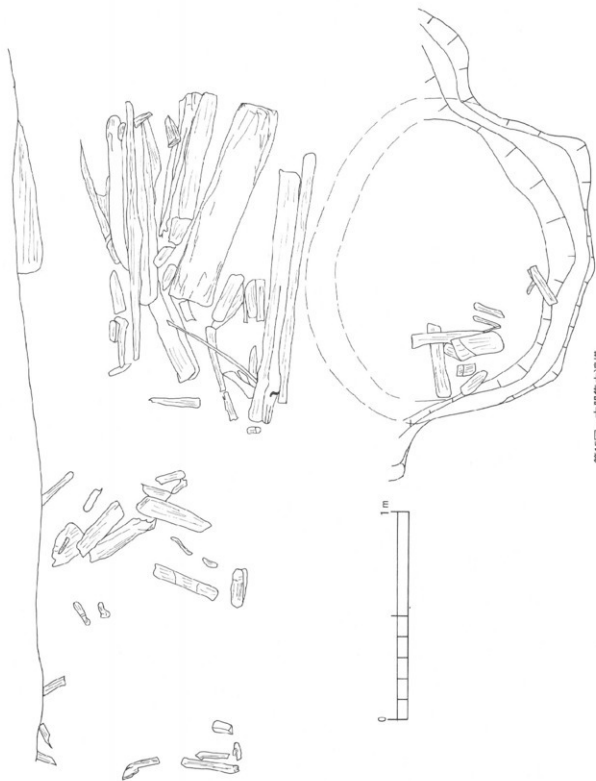
- 1 黒色粘質土(10YR1.7/1、2.5YR2/2、極暗
 赤褐色粘質土混り、0.5mm程度の砂粒含む)
 2 黒色粘質土(10YR1.7/1)

第13図 土城26・27・28



- | | |
|---------------------------------------|--|
| 1 浅黄色砂土(2.5Y7/3,1-2mmの砂粒含む) | 8 灰白色砂土(10Y7/1,1-8mmの砂粒含む) |
| 2 黒色砂質土(5YR1.7/1,1-3mmの砂粒含む) | 9 黒色粘土(10Y1.7/1) |
| 3 黒色砂質土(2.5YR2/1)と黄灰色砂土(2.5Y5/1) | 10 黒色粘土(2.5Y2/1) |
| 4 灰色砂土(7.5Y4/1)と黒色粘土(5Y2/1)とのストライプ | 11 黒褐色粘土(10YR3/1)と黒色粘土(10YR1.7/1) |
| 5 黒色砂質土(7.5YR2/1),オリーブ黒色粘土5Y3/1を縞状に含む | 12 黒色砂質土(5YR1.7/1,緑灰色砂質土7.5GY5/1をブロック状に含む) |
| 6 黒色砂質土(2.5Y2/1,黒褐色砂土10YR3/1を含む) | 13 黒色粘土(10YR2/1)と黒色粘土(5YR1.7/1) |
| 7 黒色粘土(10Y1.7/1) | 14 オリーブ黒色砂土(5Y3/1) |

第14図 溝2堰部分



第15回 木器集中遺構

第 1 表 出土土器觀察表

番号	器種	法量 cm	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	杯蓋 (杯)	復元口径 12.0 残存器高 3.6	・たちあがりは内傾してのびる。 ・縁部は丸い。 ・受部は上外方にのびる。	マキアグ、ミズビキ成形 外面 回転ナデ 内面 #	胎土 やや密 色調 外面 灰(N6/) 内面 # 器内 # 焼成 良好	須恵器 土壇1 上層 反転還元
2	杯蓋 (杯)	復元口径 12.9 残存器高 3.0	・たちあがりは上内方に短かくのびた後、小さく屈曲して内傾してのびる。 ・縁部はやや鋭い。 ・受部は水平にのびる。	マキアグ、ミズビキ成形 外面 回転ナデ 内面 #	胎土 1mm以下の砂粒を多く含む 色調 外面 灰(N5/) 内面 灰(G, 3Y5/1) 器内 # 焼成 良好	須恵器 溝2-1 中層 反転還元
3	杯蓋 (杯)	復元口径 10.0 残存器高 1.8	・たちあがりは、やや内傾して短かくのびる。 ・縁部は鋭い。 ・受部は上外方にのびる。	マキアグ、ミズビキ成形 外面 回転ナデ 内面 #	胎土 密 色調 外面 灰白(N7/) 内面 # 器内 # 焼成 良好	須恵器 溝2 反転還元
4	杯蓋 (杯)	復元口径 12.7 残存器高 2.2	・たちあがりは、内傾して上にのびたのち屈曲して垂直にのびる。 ・縁部はやや鋭い。 ・受部は水平にのびる。	マキアグ、ミズビキ成形 外面 回転ナデ 内面 #	胎土 1mm以下の砂粒を多く含む 色調 外面 灰(N6/) 内面 # 器内 # 焼成 良好	須恵器 畿内か河内 反転還元
5	杯蓋 (杯)	復元口径 10.0 残存器高 1.7	・たちあがりは、やや内傾してのび、受部は上外方にのびる。 ・縁部は鋭い。 ・底部は下方に下がる。	マキアグ、ミズビキ成形 外面 回転ナデ 内面 #	胎土 0.1~2mm程度の砂粒を含む 色調 外面 灰(N7/) 内面 # 器内 # 焼成 良好	須恵器 畿内か河内 反転還元
6	高杯 (杯部) (脚部)	基座径 5.0 残存器高 4.7 高径 9.1	・杯部は底面が平らである。 ・基部は太く脚部はやや内彎して下外方に下がり、基部近くで下方内方に屈曲する。 ・縁部は丸い。 ・長方形のスカシ窓を三方前に有する。	マキアグ、分割成形 外面 回転ナデ 内面 #	胎土 密 色調 外面 青灰(SB6/) 内面 青灰(SB6/) 器内 灰(N5/) 焼成 良好	須恵器 土壇1 上層
7	高杯 (杯部)	復元口径 12.9 基座径 4.9 残存器高 4.9	・杯部はほぼ水平にひろいたのち、ゆるやかに内彎しながら上外方にのびる。 ・縁部はやや丸い。	マキアグ、分割成形 外面 回転ナデ 杯部 1/2下方に6本の樹根状文を有す 体部に円縁を有す 内面 回転ナデ	胎土 0.1~2mm程度の砂粒を含む 色調 外面 灰(GY4/1) 内面 灰(GY4/1) 灰(GY5/2) 3Y5/3/1) 器内 # 焼成 良好	須恵器 内面自然粒付層 溝2 3 下層
8	罐 (体部)	胴部径 4.0 体部最大径 13.0 残存器高 9.0	・体部は1/2上位に求める鐘形を有し、同じく1/2上位に円孔スカシを有す。 ・底部は平たい丸底である。	マキアグ、ミズビキ成形 外面 回転ナデ 内面 回転ナデ調整 #	胎土 密 色調 外面 灰(N6/) 内面 灰(N6/) 器内 灰青色(10R3/2) 焼成 良好	須恵器 外面体部上位 1/3までス 付層 土壇1 下層
9	甗	口径 9.5 基座径 9.1 体部最大径 13.8 器高 10.2 底径 5.0	・口頸部は短かく上外方にのみ縁部は外傾する平面を有す。 ・基部はゆるやかに屈曲し、体部は扁球形を呈す。 ・底部は平らである。	マキアグ、ミズビキ成形 外面 口頸部、体部 回転ナデ 底部 クラキ 内面 口頸部 回転ナデ 体部 # 粘土塊	胎土 1~8mm程度の砂粒を含む 色調 外面 黄オリーブ灰(SGY4/1) 内面 # 器内 黄オリーブ灰(SGY4/1) 焼成 良好	須恵器 土壇1 下層 自然粒付層 ヘラ記号

番号	器種	法量 cm	形態の特徴	技法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
10	壺 (体部)	胴径 5.3 体部最大径 13.5 残存器高 10.1	・体部はやや圓錐形を有し、体部1/2 上位に最大径を定める。 ・底部は丸底である。	マキアグ、ミズビキ成形 外面 回転ナグ調整 体部・波状文(1単位4本)横方 向のホリ目 体形 凹縁を有す 底部ヘラケズリ 内面 回転ナグ	粘土 赤 色調 外面 灰(10Y5/7) 内面 灰(5S/1) 器内 赤灰色(7.5R6/1) 焼成 良好	須磨器 調2 土城 木器集中区 東部分3ヶ所 に分散 自然焼付
11	底手付壺	口径 8.0 器高 4.95 胴径 5.1	・環部から口縁部にかけてやや内傾 してのび、肩部はやや丸い。体部に 耳状の把手を有す。 ・底部は平らである。	マキアグ、ミズビキ成形 外面 回転ナグ 底部 ヘラケズリ 内面 口縁部 回転ナグ 粘土質 他は未調整	粘土 0.1~2mm程度の砂粒を含む 色調 外面 灰(5N6/) 内面 灰(5N6/) 焼成 良好	須磨器 土城1 上層 自然焼付器 反転復元
12	壺	復元口径 6.8 復元基部径 6.4 復元体部最大 径 7.1 残存器高 6.2 器径 4.6	・口縁部は上外方に短かくのび、袖部 は短い。 ・基部はゆるやかに屈曲し、体部は長 胴形を呈し、底部は平らである。	マキアグ成形 外面 口縁部 ヨコナダ 体部 ヨコナダ ヘラケズリ 内面 口縁部 ヨコナダ 体部 指頭正装	粘土 0.1~3mm程度の砂粒を含む 色調 外面 オリーブ灰(2.5GY5/1) 内面 # 器内 # 焼成 良好	須磨器 土城1 上層 反転復元
13	壺 (口縁部) (体部)	復元口径 20.2 復元口部基部 径 15.6 残存器高 8.8	・口縁部は外寄して上外方にのみ端 部を凹縁を有す。 ・体部は下外方にのびる。	マキアグ、ミズビキ成形 外面 1)凹部 回転ナグ 体部 平行タタキ 内面 口縁部 回転ナグ 体部 同心行タタキ	粘土 0.1~5mm程度の砂粒を含む 色調 外面 赤灰(7.5R7/) 内面 赤灰(7.5R7/) 器内 赤灰(7.5R6/) 焼成 良好	須磨器 調2 自然焼付器 反転復元
14	壺 (口縁部)	復元口径 22.5 復元基部径 15.8 残存器高 6.3	・基部はゆるやかに屈曲し、口縁部は 上外方にのびる。 ・口縁端部は外側に肥厚する。	マキアグ、ミズビキ成形 外面 ヨコナダ 内面 #	粘土 0.1~3mm程度の砂粒を含む 色調 外面 黄オリーブ灰(5GY4/1) 内面 灰(5S/) 器内 赤灰(2.5R5/1) 焼成 良好	須磨器 調2-1 上層 反転復元
17	高杯	口径 24.8 器径 18.0 基部径 3.9 器径 13.3	・杯部は体部から口縁部にかけては ほぼ水平にひろいた後、縁を有し上外 方にのび、口縁内端部でやや外反す る。 ・基部はやや早く、眞部は下外方に下 がったのち、屈曲し、上外方にひろ く、縁部は内傾した平面を有す。 ・底部は平らである。	マキアグ、分割成形 外面 杯部 ヨコナダ 脚部 ヘラムガキ 底部 ヨコナダ 内面 口縁部 ヨコナダ 他調整不明 脚部 指頭正装 しぼり目	粘土 0.5~2mm程度の砂粒を多量に 含む 色調 内面 灰白(5Y8/1) 外面 灰白(5Y8/1) 焼成 良好	土師器 土城1 上層
18	壺	復元口径 5.0 復元基部径 4.3 復元体部最大 径 3.4 器高 5.3 器径 3.0	・口縁部は上外方にのみ端部は丸い。 ・基部はゆるやかに屈曲する。 ・体部は長胴形を呈し底部は平らで ある。	手づくね成形 外面 口縁部 ヨコナダ 内面 多方向ナグ	粘土 1~1mm程度の砂粒を含む 色調 外面 浅黄(2.5Y7/3) 内面 # 器内 # 焼成 良好	土師器 土城1 上層 反転復元
19	壺	復元口径 12.4 残存器高 8.0 復元口径 9.0	・口縁部は外寄しながら短かくのび、 屈曲してやや上外方にのびる。 ・端部は丸い。 ・基部はゆるやかに屈曲する。 ・体部は長胴形を呈する。 ・底部は平らである。	手づくね成形 外面 ハケム 器部に指頭正装 内面 多方向ナグ 粘土質	粘土 1~3mm程度の砂粒を多く含む 色調 外面 浅黄(2.5Y7/3) 内面 # 器内 # 焼成 良好	土師器 土城1 上層

番号	器種	口径 cm	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
20	壺	復元口径 9.5 復元基部径 6.4 復元体部最大径 15.4 残存器高 16.0	・口頸部は上外方にのび端部はやや狭い。 ・基部はやや屈曲し、体部は1/2上位に最大径を求め球形をなす。	マキアグ成形 外面 口頸部 ヘラミガキ 体部 ヘラミガキ 内面 口頸部 ココナデ 体部 多方向ナデ	胎土 0.1~2mm程度の砂粒を含む 色調 外面 赤(10R4/8) 内面 赤変(10R6/8) 器内 # 焼成 良好	土師器 土趾1 上層
21	壺	口径 15.1 基部径 12.8 体部最大径 16.5 器高 14.7	・口頸部は上外方にのび端部は内傾する段を有す。 ・基部はくの字形に屈曲し、体部は球形を呈す。 ・底部は丸い。	マキアグ成形 外面 口頸部 ココナデ 体部 ハケメ 内面 口頸部 ココナデ 体部 ハケメ 体部 多方向ナデ 指取は真	胎土 0.1~2mm程度の砂粒を含む 色調 外面 赤(10R4/8) 内面 # 器内 # 焼成 良好	土師器 土趾1 上層 スス付着
22	壺 (口頸部) (体部)	復元口径 13.9 復元基部径 13.0 残存器高 5.8	・口頸部は上外方に開くのびたのち、急曲し内傾して上にのびる。 ・頸部は内傾する平面を有す。 ・体部は下外方に下がる。	マキアグ・ミズビキ成形 外面 口頸部 回転ナデ 体部 # 内面 口頸部 回転ナデ	胎土 1mm以下の砂粒を多量に含む 色調 外面 赤(2.5YR6/6) 内面 # 器内 # 焼成 良好	土師器 土趾1 下層 反転復元
23	壺	口径 15.4 基部径 13.4 体部最大径 19.1 残存器高 19.7	・口頸部は上外方にのび端部は外傾する段を有す。 ・基部はくの字形に屈曲する。 ・体部は下外方に下がり1/2上位に最大径を求め。	マキアグ・ミズビキ成形 外面 口頸部 ココナデ 体部 ハケメ 内面 口頸部 ココナデ 体部 ハケメ 体部 多方向ナデ	胎土 1~2mm程度の砂粒を含む 色調 外面 緑色(5YR5/6) 内面 赤(10R6/6) 器内 # 焼成 良好	土師器 土趾1 上層 内外面ともスス付着 反転復元
24	壺	口径 14.8 基部径 12.8 復元器高 24.8	・口頸部は上外方にのび端部は内側に屈曲する。 ・基部はくの字形に屈曲する。 ・体部は下外方にのびる。 ・底部は平たい丸底を呈す。	マキアグ成形 外面 口頸部 ココナデ 体部 ハケメ 底部 ハケメ 内面 口頸部 ココナデ 体部 ヘラケズリ 底部 指取は真	胎土 1~2mm程度の砂粒を多く含む 色調 外面 赤(10YR6/3) 内面 # 器内 赤(10YR6/4) 焼成 やや軟	土師器 外周スス付着 土趾1 上層
25	壺 (口頸部) (体部)	復元口径 18.7 復元基部径 15.8 残存器高 5.7	・口頸部は上外方にのび、端部は丸い。 ・基部はくの字形に屈曲し、体部は下外方に下がる。	マキアグ成形 外面 口頸部 ココナデ 体部 ハケメ 内面 口頸部 ハケメ 体部 ハケメ	胎土 1~2mm程度の砂粒を多く含む 色調 外面 赤(10YR7/3) 内面 # 器内 # 焼成 良好	土師器 反転復元 土趾1 上層
26	壺 (口頸部) (体部)	復元口径 15.9 復元基部径 12.9 残存器高 7.0	・口頸部は上外方にのび、端部は丸い。 ・基部はくの字形に屈曲し、体部は下外方に下がる。	マキアグ・ミズビキ成形 外面 ハケメ 内面 剥落不明	胎土 3mm以下の砂粒を含む 色調 外面 緑(5YR6/6) 内面 明赤黄(5YR5/6) 器内 # 焼成 良好	土師器 溝2 反転復元
27	壺 (口頸部)	復元口径 16.8 復元基部径 12.5 残存器高 3.7	・口頸部は上外方にのび、端部は内傾する段を有す。	マキアグ成形 外面 ココナデ 体部 ハケメ 内面 ココナデ	胎土 0.1~1mm程度の砂粒を多く含む 色調 外面 赤(10YR7/3) 内面 上部 明赤黄(2.5YR5/6) 下部 灰(7.5Y4/1) 器内 赤(10YR7/3) 焼成 良好	土師器 溝2 反転復元

番号	器種	法量 cm	形態の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
28	碗	口径 12.2	<ul style="list-style-type: none"> ・体部から口縁部にかけて内彎しながら上外方にのび端部はやや丸い。 ・底部はやや平らである。 	マキアゲ成形 外側 口際部 指節汗ののちココナデ 体部 ヘラケズリ 内側 口際部 ココナデ 体部 多方向ナデ	胎土 1~6mm程度の砂粒を多く含む 色調 外面 におい黄緑(10YR7/3) 内面 におい黄緑(10YR7/4) 断面 灰(5Y6/1) 焼成 良好	土器類 土城26
29	甕 (口部) (体部)	腹元口径 14.7 腹元基部径 12.4 残存器高 5.7	<ul style="list-style-type: none"> ・口部は外弯して上外方にのび端部はやや丸い。 ・基部はゆるやかに屈曲する。 ・体部は下外方にひろく。 	マキアゲ成形 外側 側面不明 内側 口縁部 ココナデ 体部 多方向ナデ	胎土 1~6mm程度の砂粒を多く含む 色調 外面 緑(7.5YR7/6) 内面 〃 断面 黒(5YR6/6) 焼成 良好	土器類 土城28 外面スス付着 反転復元

その他の遺物

土器類の他に、鉄滓・フィゴ羽口・砥石・鉄器・桃の種子等を出土した。次にその概略を述べたい。

鉄滓

総出土重量は、18.7kgを測る。土埴13～20の鍛冶炉周辺で約7.4kg出土している。鉄滓の分析を臨港製鉄株式会社星田工場に依頼したところ、鍛冶滓である可能性が高いという結果を得た。(第2表)

フィゴ羽口

フィゴ羽口は、出土総点数197個を数え、土埴13～20の鍛冶炉周辺で49個出土している。その大部分が小破片になっており、使用が不可能になった後に破砕され捨てられたものであろう。(第19図・第1表34)

砥石

総点数11点が出土した。荒砥・中砥・仕上げ砥の鉄器製作の各段階に対応する砥石が出土した。(第19図35・36)

鉄器

溝2より、鉄斧が出土した。袋部を有する小形の有袋鉄斧と分類される。残存長4.3cm、残存幅4.2cm、厚さ1.1cmを測る。この鉄斧は小形であり、伐採用とは考えられず、手斧として使用されたものであろう。(第19図)

桃の種子

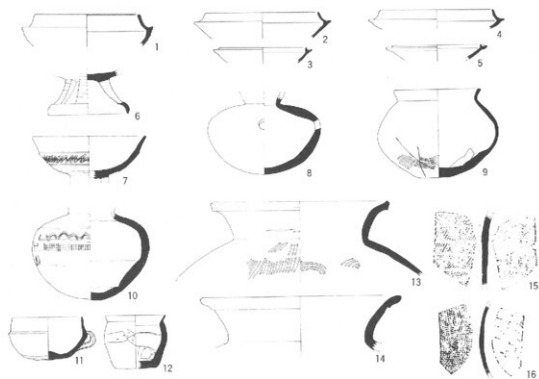
総出土点数197個を数えた。土埴1と木器集中区からは、その内の168個が出土した。88年度に調査を実施したA・B両地区においても25個の桃の種子が出土しており、森遺跡周辺の植生を考える上で、これらの桃の種子の出土は重要である。(第2表)

遺構名	鉄滓 (g)	鑄羽口 (破片数)
溝 1	10	1
溝 2 上層	145	3
" 中層	230	4
" 下層	1550	21
" 全体	1115	17
" 西南方向	845	4
溝 3		1
土塚1 上層	605	14
土塚2 上層	20	
" 下層	170	1
土塚3	30	
土塚4	5	1
土塚5	200	1
土塚6	25	
土塚9	70	1
土塚12	355	4
土塚13	385	1
土塚14	120	2
土塚15	50	3
土塚16	10	
土塚17	95	1
土塚18	530	
土塚19	1540	3
土塚24	10	
土塚25	5	
土塚27	1590	21 (1完形品)
土塚28	375	1
木器集中区	140	
鍛冶炉周辺	4705	39
中世溝状遺構	55	1
不明	3715	53
合計	18700	197 (うち1完形品)

第2表 鍛冶関連遺物出土表

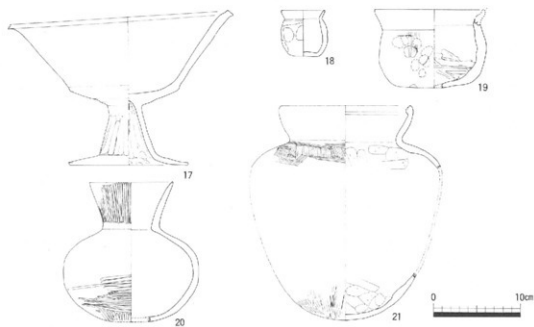
遺構名	個数
溝 1	1
溝 2	12
土壇 1	110
土壇 2	1
土壇 3	3
土壇 6	3
鍛冶炉	9
木製集中区	58
合 計	197

第 3 表 桃核出土表

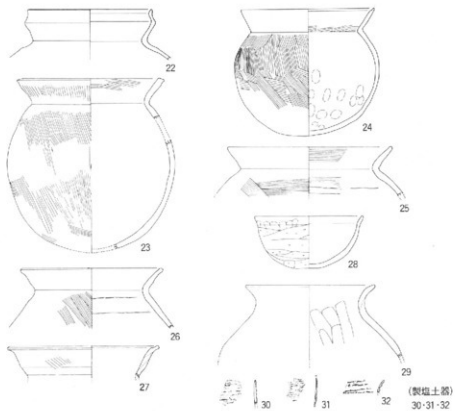


第16図 須恵器実測図

(陶質土器)
15・16



第17図 土師器実測図(1)



第18図 土師器実測図(2)



第19図 鍛冶関連遺物実測図

第4章 ま と め

C調査区については、現在、まだ整理作業は完了していないが現在迄に判明したことについてまとめる。(1)調査地の地形についてであるが、古墳時代においては、山地部よりのびた尾根筋が調査区の所まで続いていたようで、その尾根筋の先端部分に当時の住人が生活を営んでいたようである。その後、鎌倉時代までには同調査区付近は、今日でも山地部において見うけられるような弧を描いた段々畑に全てがなっていたようである。現在のような耕地の形になったのは、それ以降のことであることが確認された。(2)5世紀後半になって、突如としてこの付近に出現する多量の鉄滓やフイゴ羽口、砥石等を伴う鍛冶関連遺構は、共伴する初期須恵器を考慮して考えてみた場合、とても先住者によるものとは考えられず、多分渡来系の技術集団が移り住んだことは間違いないと考えられる。(3)溝2より堰の遺構を検出した。この堰については農業用か鍛冶に伴うものかは断定しにくいところであるが、出土遺物から推察するかぎりでは、鍛冶関連遺構より堰の築造された時期が少し古いようであるが、溝の埋土からも鉄滓が出土しており、鍛冶関連遺構との関係も否定することはできないと考えられる。

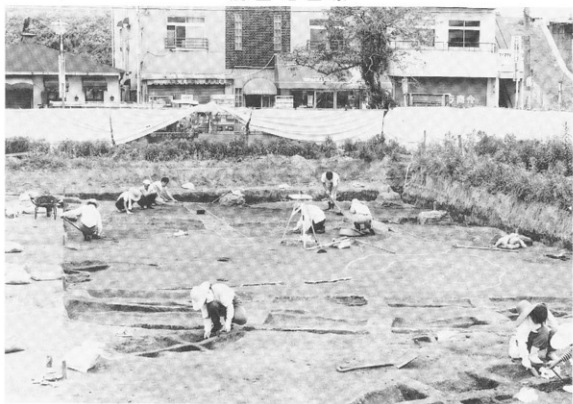
以上のように、C調査区については、前回の報告書の「まとめ」の部分で述べたとおり基本的な点で差異はなく、今回の調査では、前回の調査結果を根拠づける結果となった。

以上が今回の調査で判明したことであるが、まだ前述のとおり木器等の遺物については未整理であり、これらの遺物の調査研究が進めば、又違った結果が得られることも十分に考えられる。

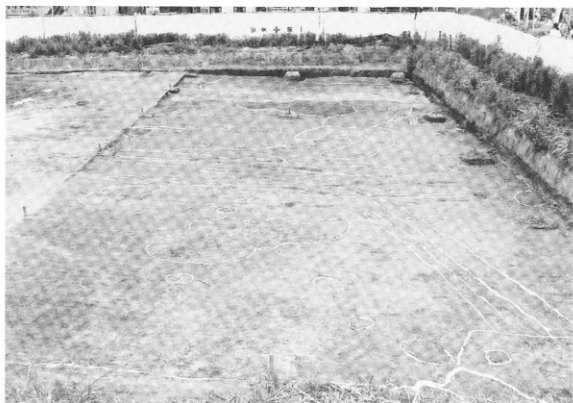
圖 版



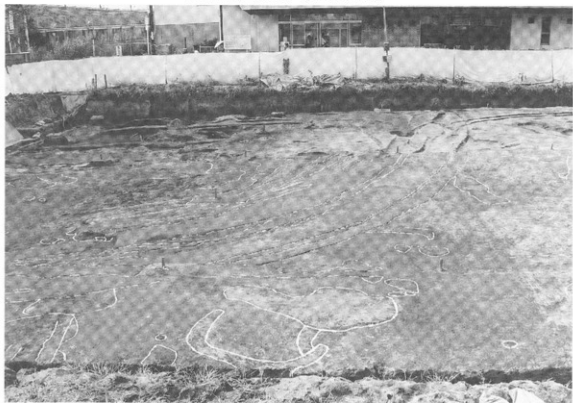
調査地全景



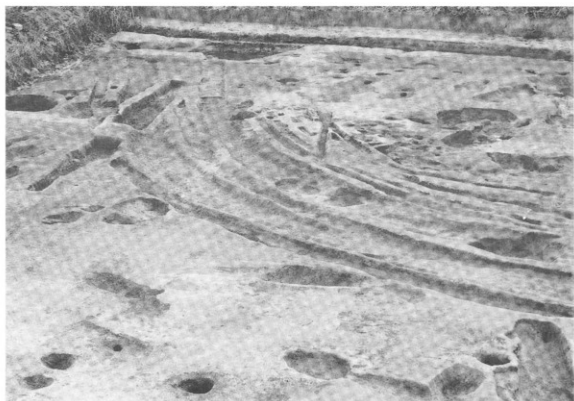
調査風景



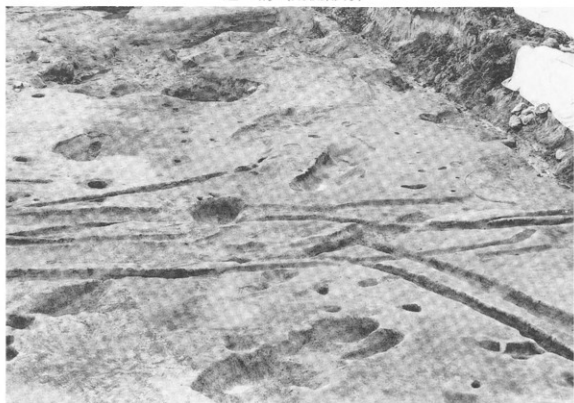
遺構検出状態（北側部分）



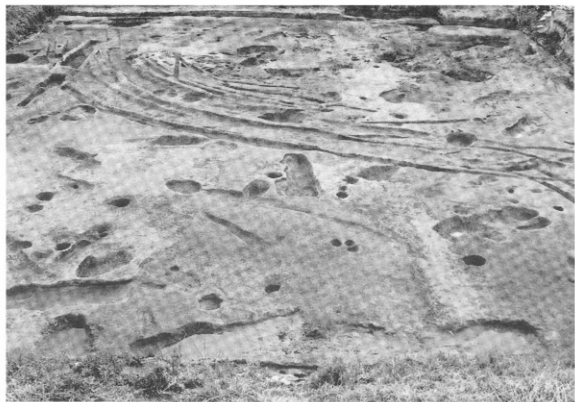
遺構検出状態（南側部分）



遺構（南側部分）



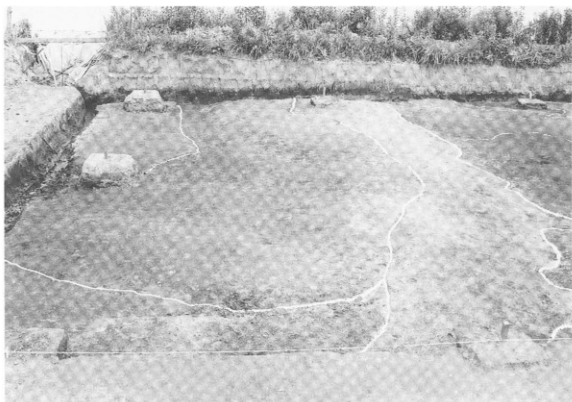
遺構（北側部分）



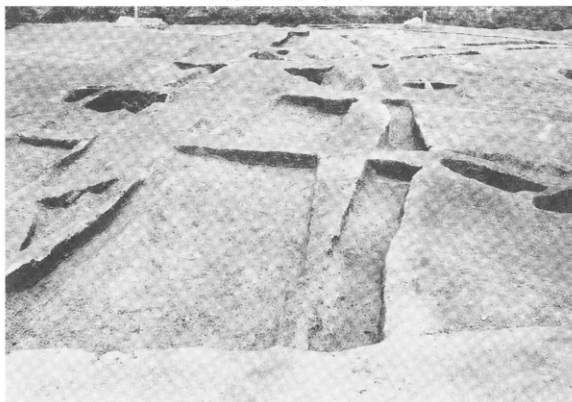
遺構全景



遺構全景



遺構検出状態（溝1）



遺 構（中世耕作面）



堰 (せき)



堰 (せき)



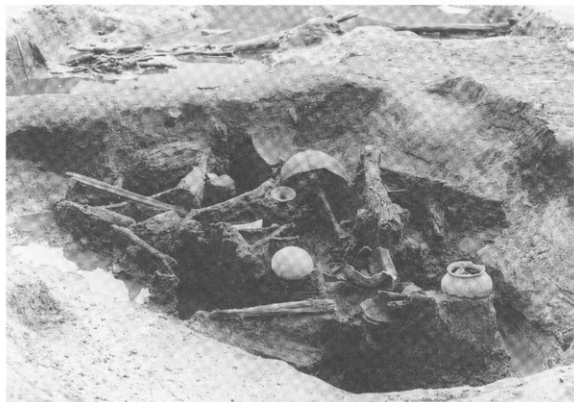
遺物検出状況（木器集中区）



遺構（木器集中区）



遺物出土狀態（土塚1上層）



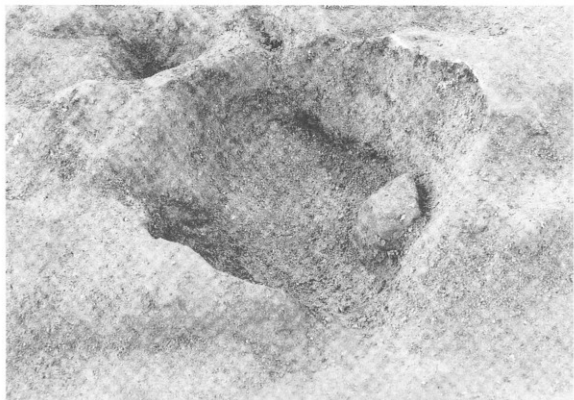
遺物出土狀態（土塚1下層）



遺構 (鉄滓集中区)



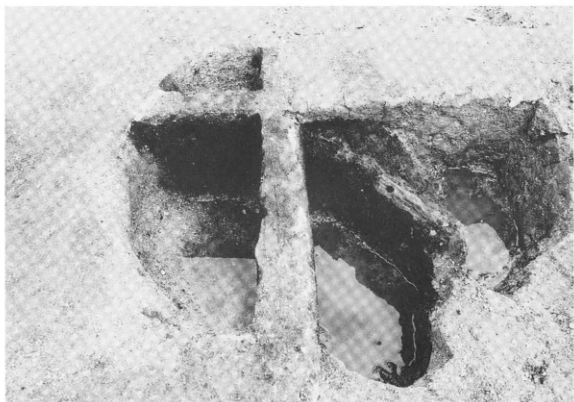
遺構 (土埴19鍛冶炉)



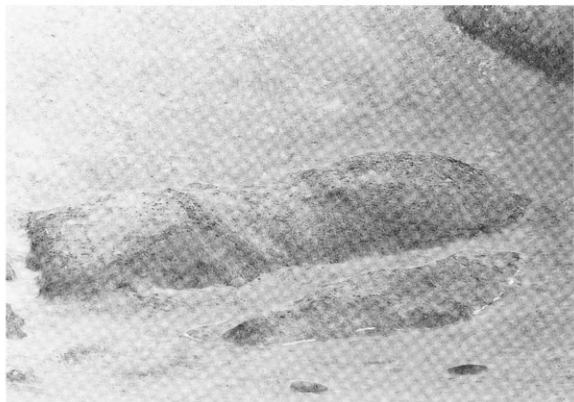
遺構 (土塚19)



遺構 (土塚7、8 鍛冶炉)



遺構 (土塚22)



遺構 (土塚10、11)



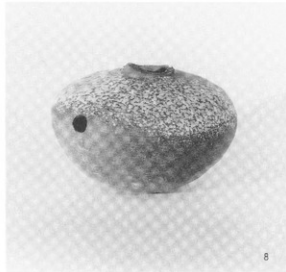
遺 構 (土塚27)



遺 構 (土塚28)



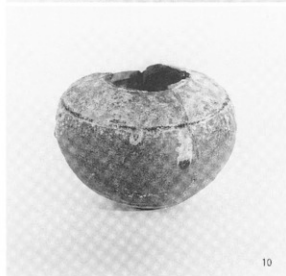
12



8



9

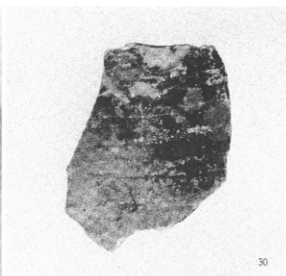


10



11

出土遺物



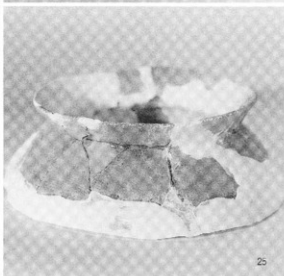
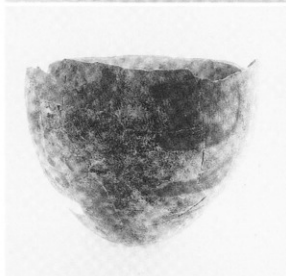
出土遺物



18



19

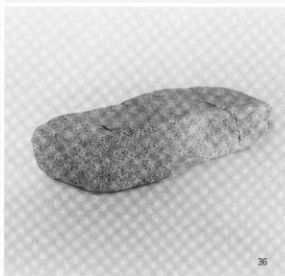
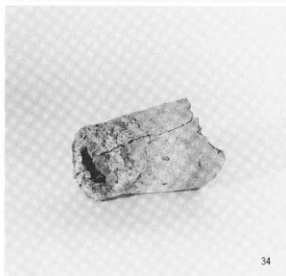


25



28

出土遺物



出 土 遺 物

